

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \*ローマで双子育児⑳\*

浅田 朋子

2022年3月に入り、ようやくイタリア全土で本格的に対策緩和の方向で進み出した。

小学二年生になった双子の通う小学校でも陽性者は出ているものの、学級閉鎖になることはなくなった。

美術館や動物園なども通常どおり入場できるようになり、3月に入り暖かい日も増えてきたので、ローマのボルゲーゼ公園内にある「Bioparco di Roma (ローマ・ビオパルコ)」動物園に連れて行くことにした。

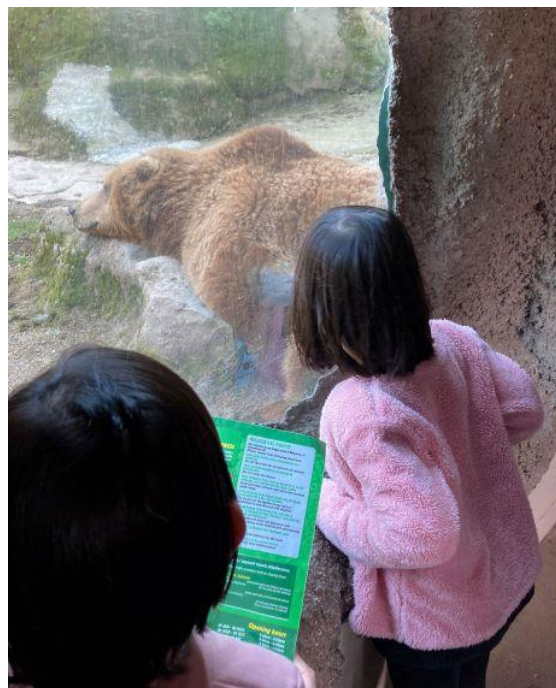
実は私も双子もローマにいながら今まで一度もこの動物園に行ったことがなかった。毎年夏休みに帰省する度に、実家のある京都の京都市動物園に連れて行ってだったので、特に珍しい動物がいるわけでもないローマの動物園にあえて行くことはなかった。

当日は良い天気恵まれ、初めてのローマ動物園に双子は大はしゃぎであった。夫も小学生のとき以来訪れたことがなかったので「懐かしいな～、楽しみだね！」と嬉しそうだった。

しかし夫のその笑顔は、入場チケット売り場のお姉さんの「大人は19ユーロ、お子さんは16ユーロです」の言葉を聞いて消え去った。「え？子供16ユーロ・・・？子供は無料だったと思うけど・・・」そして蚊の鳴くような声で「・・・40年前は」と続けた。「へーそうですか！今は有料です。合計70ユーロですね」と冷たくあしらわれた。悲しそうに70ユーロを払うと夫は入場ゲートにトボトボと歩き出した。

「京都の動物園もこんなに高かった？」と夫に聞かれ「中学生以下は無料で、大人でも620円や」と言う。「素晴らしい国だね、日本は」とため息をついた。

気を取り直し、家族で園内地図を眺めた。園内は森林公園のように自然に囲まれ、とても広大である。ゆっくり見てまわったら日が暮れそうだ。「70ユーロ分、一つの見落としもないようにキビキビと見学に出発！」と夫は気合いを入れて歩き出した。



【やる気のないウマを見る双子】

双子は広い園内を楽しそうに駆け回りながら、順調にゾウやキリン、トラ、ライオンなどを見て回って喜んでいて、ところが急に「ママー！！きゃー！！」と叫び声をあげた。見ると、びっくりしている双子の前を、トコトコとクジャクが横切っている。「クジャクやん！檻から逃げ出したんか！？」と驚いていると隣に歩いていた家族が「あ～それね、僕もびっくりしたけど、どうも放し飼いになっているみたいだよ」と言った。クジャクが放し飼い…。気をつけて道の脇の茂みよく見ると、木の陰にポケーと座っているクジャクがちらほらいる。「なんか、クジャクという輝きが一切感じられないよね…」と夫がポツリと言った。確かに放し飼いやえに羽根は土で汚れ、檻の中で人に見られる緊張感の全くないクジャクは、ただの薄汚れた大きな鳥であった。

しばらく怖がっていた双子も、見慣れたニホンザルの猿山を見つけて元気になった。「日本のおサルさん！」と手を振り「おーい！おーい！おサルさん！！日本から来たの～！？」「飛行機できたの～！？」と大声で話しかけている。「JALのビジネスできたんだよ」と夫がしょうもない冗談を言った。隣の家族の子どもも喜んで見ている。お父さんが「ほら可愛いね、マカコだよ～」と言っている。



【ニホンザル Macaco japonicus】

マカ子…？猿の名前か？芸でも出来る有名な猿でもいるのかな？と見ていると、みんな「ほらマ

カコだよー」と言っている。「マカ子って園の人が名前つけてたんかなー？」その名前のおかしさから「ケメ子の唄」を思わず口ずさんでしまった。

「しかしマカ子とは…。外人が考えそうな変な日本名やな。しかしイタリア人、センスないな。ははは、マカ子！！」と笑いながら夫にいうと、軽蔑した目で私をちらりと見て「そこ、読んでみたら」と柵にかけられた展示動物説明のボードを指差した。そこには「Macaco giapponese」とでかかど書かれていた。ニホンザルの学名は「Macaca fuscata」で、イタリア語では「Macaco giapponese」なのである。

今まで46年間生きてきて初めて知ったこの事実…。ニホンザルは学名もニホンザルだと思っていた。さっきまで「マカ子～！」とケメ子の唄を歌いながら笑っていた自分…。周りに日本人がいなくて本当によかった。「ママー、マカ子ちゃんは何れ？」と双子に聞かれ「みんなマカ子ちゃんやねん…。」と答えるしかなかった。

猿山に続いてカンガルーを見に行ったら。「カンガルー大好き！」と地図を見て楽しみにしていた双子は案内看板を見つけ、興奮して柵の方に駆け寄って行った。昔オーストラリアでカンガルーを間近でたくさん見た時の興奮が蘇ってきて、私もとてもワクワクした。しかし、柵の中をみるとワラビーに混じって小さいカンガルーみたいな動物がちよこちよこ動き回っている。「ママ、あれ、カンガルー？」確かに小さい…。私たちが想像する大きな種類のアカカンガルーや大カンガルーなどに比べると、とても小型である。説明ボードには「Canguro di Bennet (ベネットキノポリカンガルー)」と書かれていた。大きなカンガルーを想像していた双子は「なんか、ちょっと違う…。」と残念そうであった。「小さくて可愛いねえ～」と言っても「小さいのはカンガルーじゃない」と不服そうである。小さなカンガルーが寂しそうに集まっている横のドブみたいな水たまりで、カピバラが無心に草をもぐもぐと食べている。

「オーストラリア・南半球ゾーン！！」とでかかど案内看板に書かれていたので、この大きな園内からして、壮大なオーストラリアを思い起こさせるゾーンを期待していたのだが、二軍落ちみたいな動物たちがごちんまりと一箇所にとめられ、「ご



めん、結局あんまり集められなかった・・」というものの哀しい雰囲気がいじみ出ている。

さて、大体の場所は見て歩き、最後は「RETTILARIO」と呼ばれる爬虫類館に向かった。ここには爬虫類、両生類、無脊椎動物が集められている。この施設で飼育されているこれらの動物の多くは、警察による押収・没収品だそうで、動物の保護センターとして動植物の違法取引問題に対する訪問者の意識を高める活動も行っている。

館内に入ると最初のゾーンは亜熱帯地域の爬虫類を展示する温室になっている。入った途端「もわ～～！！」とすごい湿気と熱気が押し寄せる。コロナ対策でマスクを着用しているので、さらに息苦しさをを感じる。最初は「わ～！すごいねえー！」と異常なほどの湿気に喜んでいた双子も徐々に髪の毛が濡れ、あまりの湿度と熱気で視界が悪く、霧の中を歩いているような状態に「ここから出たい」と言い出した。夫が来ないのでどうしたのだろうと目を凝らすと、メガネが曇って立ち往生していた。「ちょっとこれ、やりすぎやで。湿度調整、間違ってるんちゃう？」。前にいた家族も「苦しくて、倒れそう・・」とハアハア言っている。みんな動物を見る余裕などなく、足早に次のゾーンに向かって行く。たまにちらりと周りを見ても草がボウボウに生えた湿地の中に動物の姿は見えない。「何なんだよ・・ここ・・」とまるで罰ゲームのような状態にみんな半泣きである。と、前を歩いていた家族のお父さんが「ああしんどい」と通路サイドの柵に手をかけた途端「わああ！！！」と叫んだ。「パパ！！」「ワ、ワニが！！！」と騒いでいる。見ると、柵から1.5メートルほど下に、大型のワニが静かに佇んでいるのだ。ち、近すぎる・・。これは驚くのも無理はない。しかも視界が悪く、少しもやが切れた隙間から突然目に入ってきたのである。この温室はちょっとしたサファリパークのような臨場感と恐怖感があった。動物の動く音は聞こえたが、どこにいるのかわからないまま、温室を急いで抜けた。

次は通常のガラスケースに展示されている爬虫類、両生類ゾーンである。ほっと一息ついて落ち着いて見てまわった。しかし、長い廊下をどこまで行っても、ヘビ、ヘビ、ヘビ・・カエル、カエル、

カエル、イグアナ、カメレオン、カメレオン・・。「この展示、永遠か？」と思うくらい続く。「しかしまあ、よくもここまで押収したよ」と警察を褒めたい気分になる。「ママ、見て。カメさんもみんなスーパーのミックスサラダ食べてるよー」と双子が指差す。スーパーのミックスサラダ？何をおかしなことを言うのかとケースを覗くと、確かにどこから見てもスーパーで袋入り「0.99 ユーロ」で売っているミックスサラダが器に入れて置いてある。「これは・・・間違いなくミックスサラダだな・・」と夫も見入っている。大きさ、切り方、野菜の種類、0.99 ユーロミックスサラダと思わないように見る方が難しい。違法取引で遠い祖国から突然イタリアに連れて来られ、危うくカバンや財布になりかけたところを保護され命は助かったが、狭い場所でボソボソとミックスサラダを食べているカメを見て「あかん、違法取引は、あかんで・・」と強く思った。



【爬虫類館の温室にいたワニ】

自然に囲まれた園内をのびのびと歩きまわり、日本の動物園で見た以上のたくさんの動物を見て新たな発見や学びもあり、双子はとても満足そうであった。

開放感のある「Bioparco di Roma」は、公園の散歩中に動物を見ているような気分になれる素敵な動物園であった。

また来年も、マカ子や、小さなカンガルー、サラダミックスを食べているカメやカメレオンたちに会いに行こうと思う。

(元当館語学受講生)

わたしとロダリー⑫

## すべてはひとつの月のした

竹田 理乃

つきみれば——と聞けば、手が「わがみひとつの」と書かれた札を探してびくっと動いてしまうという人を、ひとりならず知っています。大江千里の〈月みればちぢにもこのそ悲しけれ わが身一つの秋にはあらねど〉を噛み砕けば、月を見ると心が悲しく乱れちゃうんだよね、寂しい夜って私ひとりのものじゃないんだけどさ……といったところでしょうか。小学校のクラスメイトと百人一首で遊びながら覚えた和歌ですが、意味を理解したのは大学で漢詩をじっくり習ってからのことでした。この「私だけの秋じゃない」には、白居易が「燕子楼」という作品で〈燕子楼中霜月の夜 秋来たりてただ一人の為に長し〉と詠ったくだりが踏まえられています。秋の長夜、かつて幸福な日々を過ごした楼閣から、自分と同じ月を見上げている亡き友の愛した女性を想って作られた詩です。

この月を見上げているのは、私ひとりじゃない。その悲しみを抱えているのは、あなただけじゃない。国境や時代を越えて人の心をひとつの淡い光のなかに包んでくれる月を見上げる仲間には、イタリアの児童作家ジャンニ・ロダリーの姿もあるようです。

4月13日現在、Amazon Italiaの児童書売上げランキングで1位に輝いているのは、つい前日に出版されたばかりの絵本『キーウの月』——ロダリーの作品です。

ウクライナにおける人道的緊急事態に直面して、私たちエイナウディ社はどうしたら自分たちの役割を果たせるかを自らに問いました。そして、私たちが最もよく知っていることをしようと決めました。本を出版することです。ほとんど予言するように、1955年、ロダリーは博愛賛歌「キーウの月」を書いていました。そこで私たち

は、とくにこのフィラストロッカを出版することに決めました。まさしく「キーウの月」は、開戦以来、平和希求のシンボルとなっています。

(cf. *La luna di Kiev*, Amazon Italia)

このコメントの通り、ロシアがウクライナへ侵攻した日、ロダリー愛好者のグループに入っている私のFacebookは「キーウの月」に埋め尽くされました。

キーウの月が  
ローマの月みたいに  
きれいかなんて  
いったいだれが知るものか  
おなじ月なのか  
それともただの妹なのか

「まあ、わたしはいつもおなじよ！」  
月がいい返します  
「わたし、まさか  
あなたの頭に乗っかってる  
ナイトキャップでもないからね！」

この高みを旅しながら  
みんなのことを照らすのよ、  
インドからペルーまで、  
テヴェレ川から死海まで、  
わたしの光は旅するの  
パスポートなしに」

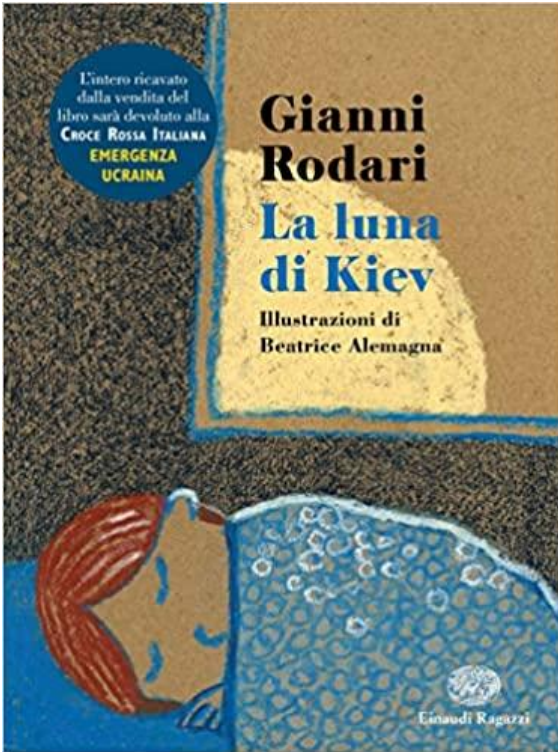
「パスポートなしにね」

この作品の載っている *Filastrocche in cielo e in terra* (Einaudi, 1960) が手元になかったので、とりあえずレップブリカ新聞の Web コラムから孫引きで翻訳させていただきましたが、高価なものではありませんので、興味のあるかたはオリジナル本をお取り寄せください。

この月と同じく、ロダリーの作品は旅好きです。*Rodari, le storie tradotte* (ロダリー 翻訳されたおはなし) という本には、海外で出版されたロダリー作品の表紙がいろいろと載せられているのです

が、どれもかわいく個性にあふれ、イタリア生まれのキャラクターたちが新しい場所で出会う新しいお友だちのために装いを凝らしているようで、ほほ笑ましくなります。アラビア語やギリシャ語はちんぷんかんぷんですが、スペイン語や中国語のタイトルなら、単語の並びくらいは見当がつきそうです。

ずらりと並んだ表紙たちのあいだには、キリル文字のあしらわれたものが目に付きます。日本で最初に紹介された『チボリーノの冒険』の翻訳にあたり、そのロシア語訳が参考にされたというエピソードも残っているくらいです。若き日の愛読書にトロツキーを挙げるロダーリはロシアとの関係が深く、杉浦明平版の巻末にはソビエト連邦でラジオ番組化されたときの楽曲が紹介されています。また、この作品はモスクワのポリショイバレエ団の演目になったこともあるのだとか。



モスクワといえば、私の友人が暮らす街です。イタリア滞在時、彼女の帰国までしばらく机を並べて勉強していました。ロシアのウクライナ侵攻が始まったとき、まずはNHK、BBC、それからRAIの報道をチェックし、なにかの間違いなんかじゃなく、とても酷いことが起きているのだという

認識がはっきりしたあと、真っ先にしたことといえば、彼女に「Come va?」とチャットを飛ばすことでした。

彼女の第一印象は「威圧的」でした。厚みのある長身から見おろしてくる淡い色の眼と、ぎゅっと寄せられた眉の迫力を覚えています。パートナーの必要な会話のレッスンを前に、お隣に座っちゃったのものにかのご縁、このクラスで最も温厚な私がお引き受けいたしましよと、今から思うと失礼極まりない上から目線で誘ったところ、帰り支度もそこそこに頭上から降ってきた「ごはん、作ってあげる」との一言で、そのままふたりで買い出しに行くことが決まり、私の下宿で夕食を囲むことと相成っていました。ペリメニを茹でているときに判明したのですが、遠巻きにされて寂しかったから、私が寄ってきたのが嬉しかったそうです。

ペリメニというのは、練った小麦粉でお肉の餡を包んだロシアの郷土料理です。私たちの共通項がイタリアだったので「トルテッリーニみたい」とコメントしましたが、日本人には水餃子みたいと説明した方がわかりやすそうです。それを冷凍で買ってきて、私が常備していたチキンブイヨンで煮込んだだけの、簡単に温かくて、ゆっくりお話できるようなメニューの夕食でした。

買い物に出かけた先は、ウクライナ食料品店でした。

語学レベルの問題でつっけんどんだった「ついて来て」に従い、細い道へ折れた先にあったお店のマトリョーシカだらけのショーウィンドウやキリル文字の看板に、まだ彼女と打ち解けていなかったこともあって、ちょっと挫けそうでしたが、これもまた第一印象だけによる杞憂。まだ舌に慣れない「Scusi!」に呼ばれて出てきてくれた店員さんは、おっかなびっくりのアジア人を連れた彼女がロシア人だと知ると、大げさなくらいに歓迎してくれました。

ロシア人の彼女が「ここはウクライナ食料品店です」と述べた口調は、きっぱりとしたものでした。ウクライナ料理とロシア料理には違いがあるけれど、共通点もある。だからこのお店で、私がモスクワで食べているものを探して、あなたと食べる。

私が「ウクライナ」と復唱すると、店員が私の出身地を知りたがりました。東日本大震災の翌年の

こと、私が日本ですと答えると、奥から店員の姉だという女性が出てきて、自分たち一家はチヨルノービリ出身なのだ打ち明け、私の家族の安否を気遣ってくれました。

原発事故があってイタリアに流れ着いたのだというエピソードから、なにが複雑な話がしたくなったようで、しばらく友人と店員たちのあいだでロシア語のやりとりがありました。そのなかで、友人が少し考えてから発したセンテンスが、ウクライナ人の姉弟を喜ばせました。どうしたのかと割り込んだ私に「ウクライナ語もちょっとできるの」と笑った彼女は得意げで、その表情が、ロシア語とウクライナ語のあいだにある確かな違いの存在を、私に理解させてくれたように思います。

ウクライナ侵攻のニュースを見ながら「どうしてる？」と訊いた私に、彼女がくれた返事は「私は大丈夫。でも、ウクライナにいる親戚が心配」でした。とにかく「あなたと家族を心配してる」とだけ伝えて、今はそれっきりです。

今、彼女の身の回りになにが起きているのか、彼女がどんなことを見聞きして、どんな風に考えているのかを知るのは、なんだか怖いような気がします。それでも事態が落ち着けば、私は彼女に「どうしてる？」と言葉をかけるつもりです。あの晩、私の冷蔵庫に置いて行ってくれたペリメニを食べるのがもったいなくて、少しずつしか残りを茹でられなかったこと、もっとロシア料理を食べてみたいこと、できればウクライナ料理も紹介して欲しいことを、あの時よりもずっと上達したイタリア語で伝えたいから。もし、また会えるなら、彼女のお子さんがロシア語で読んでいる『チポリーノの冒険』を日本語版で贈ってあげたら、おもしろがってくれるかなって、そんな暢気な相談をしたいから。そしてなにより、彼女がまだ、私たちは似ているけれど違う、ロシアとウクライナは違うけれど、同じようなものをおいしく食べるのですと言った、私の知る彼女のままだと確かめたいから。夜道、ほら月が出てるとにっこりした彼女を、手放さないために。

"La luna di Kiev"

Chissà se la luna  
di Kiev  
è bella  
come la luna di Roma,  
chissà se è la stessa  
o soltanto sua sorella...

"Ma son sempre quella!  
– la luna protesta –  
non sono mica  
un berretto da notte  
sulla tua testa!

Viaggiando quassù  
faccio lume a tutti quanti,  
dall'India al Perù,  
dal Tevere al Mar Morto,  
e i miei raggi viaggiano  
senza passaporto".

senza passaporto".

<参考資料>

レブプブリカの記事

[https://www.repubblica.it/cultura/2022/03/12/news/la\\_storia\\_una\\_poesia\\_di\\_rodari\\_la\\_luna\\_di\\_kiev\\_diventa\\_virale\\_su\\_internet-341136146/](https://www.repubblica.it/cultura/2022/03/12/news/la_storia_una_poesia_di_rodari_la_luna_di_kiev_diventa_virale_su_internet-341136146/)

*Rodari, le storie tradotte*, Interlinea srl edizioni,  
2002, Roberto Cerati

(元当館語学講師)

---

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>